



ginmaru to nouen



山の民と海の民

むかしむかし、まだ人が、その日に食べる分だけを取って暮らしていた頃の話です。

ある島に、山に入り木の実を採って暮らす山の民と、海に入り魚を獲って暮らす海の民がいました。

山の民と海の民が暮らす、そのちょうど真ん中には、小高い丘がありました。

山の民と海の民は、その小高い丘で出会いました。

やがて、山の民は木の実を、海の民は魚を丘に持ち寄り、交換するようになりました。

山の民はおしゃれ好きで、銀の腕輪を身につけていました。

海の民は銀の腕輪を欲しがり、大量の魚を獲って交換してもらいました。

やがて、海の民の多くが銀の腕輪を持つようになりました。

海の民は海が荒れて魚が獲れない日には、銀の腕輪を手放して木の実と交換してもらいました。

やがて、銀の腕輪の代わりに銀の小さく丸いものが造られ、山の民も海の民も、それを使って食べ物と交換するようになりました。

銀の小さく丸いものは銀丸と呼ばれるようになりました。

それからしばらくの年月が経って、山の民から木の実を入れるカゴを作るのが上手な娘が現れました。

娘のカゴは軽くて木の実をたくさん持ち帰れると評判になりました。

娘は頼まれて人のカゴを作るようになりました。

カゴを作ると、お礼に銀丸をいっぱいもらいました。

娘は銀丸を木の実や魚と交換してお腹いっぱい食べることができたので、自分で山に入って木の実を採ることはしなくなりました。

娘は小高い丘に移り、カゴ屋を開いて生活するようになりました。

また、海の民の中では魚を獲る網を作るのが上手な若者が現れました。

若者が自慢の網を海へ投げ入れると、捉えた魚は逃がさず引き上げられたので評判になりました。

若者は頼まれて人の網を作るようになりました。

網を作ると、お礼に銀丸をいっぱいもらいました。

若者は銀丸を木の実や魚と交換してお腹いっぱい食べることができたので、自分で海に入って魚を獲ることはしなくなりました。

若者は小高い丘に移り、網屋を開いて生活するようになりました。

やがて、山の民も海の民も、人より上手にできることで銀丸をもらう者が増えました。

銀丸を稼げる者は小高い丘に移り、お店を開いて生活するようになりました。

そして、山に入り木の実を採る者や、海へ入り魚を獲る者は減りました。

しかし、木の実を採る便利な道具や、魚を獲る便利な道具が次々に作られたので、木の実を採る量や、魚を獲る量は、以前より多くなりました。

村と町

それから100年が経ち、200年が経ちました。

かつて山の民や海の民が暮らしていた場所は、村と呼ばれるようになりました。

村で暮らす人は少なく、ひっそりとしています。

銀丸を稼げる者が集まった小高い丘は、町と呼ばれるようになりました。

町で生活する人は多く、にぎやかです。

町で大きく成功した者は、大商いの主人と呼ばれています。

大商いの主人の中には、村から町へ食べ物を運ぶための道を石で舗装したり、外国の船が立ち寄るための大きな港を造ったりする者が現れました。

彼は町造りの主人と呼ばれて、特別に尊敬されました。

町では、いろんなお店が商いをしています。

服を売るお店、食べ物を売るお店、家を建てる大工さん、道具を売るお店。

安くて良い物を売るお店が人気で大商いを行っています。

お店の主人は、お店の売り物を安くて良い物にするよう努力をしました。

便利な道具を使い、効率よく仕事をするように工夫をしたのです。

町の人は安くて良い物が買えるので喜びました。

安くて良い物が作れないお店は人気がなく、つぶれてしまいました。

残ったお店では効率よく物を作るので、仕事をする人を減らしていきました。

お店は減り、仕事をする人も減ったのですが、便利な道具を使い、効率よく仕事をするように工夫をしたので、町で売られる物の量や、建てられる家の数は以前より多くなりました。

町の問題

それから300年が経ち、500年が経ちました。

町では仕事を失くし、服や食べ物が買えない者や家を持たない者が増えました。

彼らの多くは路上で寝泊まりし、仕事をもらえるチャンスを待ちました。

しかし、仕事を失う者は増え続け、多くの人が力尽きて死んでしまいました。

町の人々はこのことを気にしませんでした。

努力をすれば報われ、努力をしなければ報われないと考えたのです。

仕事を失った者の中には、お店を襲い、盗みをする者が出てきました。

お店の主人は警備兵を雇い、お店を守るようになりました。

警備兵は丈夫な防具を身に付け、よく切れる刀を持ってお店を守りました。

お店を襲う者は次々と警備兵に殺されていきました。

町の人々はこのことを気にしませんでした。

努力をすれば報われ、努力をしなければ報われないと考えたのです。

町造りの主人の考え

この時代にも、町造りの主人と呼ばれる者がいました。

町造りの主人は町の人々と同じようには考えませんでした。

努力をしても報われない人々がいると気付いたのです。

いや、むしろ、お店が努力をして安くて良い物を効率よく作るために、報われない人々が増えていると気付いたのです。

町造りの主人は考えました。

そして、大商いの主人、山の民、海の民を集めて話をしました。

「大商いの主人。

あなた達が安くて良い物を売ることは、町の人々に喜ばれている。

それはあなた達が効率よく仕事をするように努力をしたからです。

しかし、結果として仕事をする人の数は減り、今日食べる物にも困る人が、町にあふれています。

だからといって、あなた達に効率よく仕事をするなどは言えません。」

町造りの主人は続けて言いました。

「そこで私は、仕事を失くした人のために、農園を造ろうと思うのです。

農園では、そこに暮らす人々の家を建て、そこに暮らす人々が食べるための作物を作ります。

町で仕事を失くした人は農園で暮らし、農園での作業を手伝います。

農園の管理は山の民にお願いしたいと思っています。

大商いの主人には、農園造りに必要な銀丸を出して欲しいのです。」

大商いの主人たちは、だまって様子を伺っています。

すると、山の民が口を開きました。

「オレたちの村は人が減り、めっきりさみしくなった。

農園の管理で人が戻ってくるのなら喜んで引き受けたい。

農園で作る物は、オレたちが一番詳しいから任せて欲しい。」

「ありがとう。」

と町造りの主人はお礼を言いました。

次に大商いの主人の中でも一番大きなお店を持っている肉屋の主人が話し始めました。

「私は農園造りに必要な銀丸を出します。

私も島に暮らす人の役に立って、町造りの主人のように尊敬されたいのです。」

「ありがとう。」

と町造りの主人はお礼を言いました。

次に道具屋の主人が話し始めました。

「うちには銀丸を出す余裕はないね。

けどうちの道具なら農園に持って行っていいよ。

いくらでも作れるからね。」

「ありがとう。」

と町造りの主人はお礼を言いました。

今度は海の民が口を開きました。

「オレの村では海畑というのを造って海藻を育てている。

オレの村にも人をよこしてくれないか。」

「ありがとう。

それもやりましょう。」

と町造りの主人はお礼を言いました。

次に大工の大商いの主人が口を開きました。

「オレは農園や海畑に暮らす人の家を建ててやるよ。」

「ありがとう。」

と町造りの主人はお礼を言いました。

農園の誕生

話し合った結果、まずは農園を造ることになりました。

そこで暮らすみんなの食べ物を作るには、海畑より農園の方が良いと考えたからです。

農園造りは、まず、大工が家を建てることから始めることとなりました。

大工の大商いの主人は100人の大工を集めて、農園の家を建てるため山へ向かうように言いました。

そして、今後は農園で暮らすように言いました。

(町で働く大工の数は多すぎたのです。

大工の大商いの主人は思うようには人が減らせていなかったのです。)

山の民が農園で作る最初の作物をトウモロコシと決めると、農園造りはいよいよ本格的になりました。

トウモロコシは山の民の主食で、最も収穫量が多い作物でした。

トウモロコシは長期間の保存もできるし、風車の中にある石臼で挽いて粉にすると、いろんな料理に使うことが出来ました。

農園造りが本格的になると、町の大商いの主人は銀丸や物を送り始めました。

肉屋の大商いの主人はお店で働く人を100人集めて、農園造りに必要な銀丸と大量の干肉を持っていくように言いました。

そして、今後は農園で暮らすように言いました。

(町の肉屋で働く人の数は多すぎたのです。

肉屋の大商いの主人は思うようには人が減らせていなかったのです。)

道具屋の大商いの主人はお店で働く人を100人集めて、農園造りに役立つ道具を持っていくように言いました。

そして、今後は農園で暮らすように言いました。

(町の道具屋で働く人の数は多すぎたのです。

道具屋の大商いの主人は思うようには人が減らせていなかったのです。)

これを見た他の大商いの主人もお店で働く人を100人集めて、お店の売り物を農園に持っていくように言いました。

そして、今後は農園で暮らすように言いました。

兎に角、銀丸やら物やら人やらが農園に集まったので、農園はにぎやかになりました。

町で仕事を失った人は、食べ物を求めて農園へ向かいました。

おかげで町では盗みを働く者がいなくなり平和になりました。

警備兵は仕事がなくなったので、やはり農園へ向かいました。

農園造りは活気にあふれ、見る見る進みました。

やがて、1年が経ち、最初の収穫の日を迎えました。

町造りの主人は、農園での平和な暮らしを祈念して、規則を決めることにしました。

1. 農園のみんなが食べ物に困らないことを一番に考える
2. 農園のみんなが特に困っていない場合、何も変えてはいけない

このような規則を決めた理由は、町で起きた問題を反省したからです。

町の人が安くて良い物を求めたため、お店では便利な道具を使い、効率よく仕事をするように努力をしました。

その結果、仕事を失い、今日の食べ物にも困る人が増えたのです。

農園では、兎に角、みんなが食べ物に困らないことを一番に考えることにしたのです。

農園での規則は簡単なので、みんなが守ることができました。

農園は十分な大きさに造られたので、食べ物が不足して困るなどということは、起きませんでした。

それでも5年に1度とか10年に1度、川の氾濫やら大地震やら思いもよらぬことが起きたので、その時は、町の便利な道具を取り入れて問題を解決することとしました。

町の道具は、農園で修理ができて使い続けられる物は、そのまま取り入れましたが、町の人しか修理ができない複雑な物は壊れるまで使うと捨ててしまいました。

農園はゆっくりゆっくりと変わっていきました。

一方で、町の様子はというと、ものすごい速さで変わっていきました。

効率よく物を作ることが進み、便利な道具が次々に現れました。

働く人の数も減り続けましたが、仕事を失った人は農園へ向かえばよかったので、昔のような問題は起きませんでした。

2つの社会

それから1000年が経ち、2000年が経ちました。

農園はゆっくりゆっくり変わっていったので、様子はむかしとあまり変わりません。もちろん、お米やら野菜やら作物の種類は増えましたが、一番作られているのがトウモロコシであることには変わりありません。

農園の他にも、海畑や山林が造られました。

海畑は、海の民が造っていた海藻の海畑と、海の水をきれいにするための貝の海畑があります。

貝の海畑は、山から流れる川の水が海の水と混ざり合う辺りに造られました。

実は、町に人が多く集まるようになって、海の水が汚れ始めていたのです。

この時代にも町造りの主人と呼ばれる者がいました。

ある時、外国から来ていた商人に、町造りの主人は次のような話を聞きました。

「商人の国では、川の上流の山に木をたくさん植えて、
川の水が海の水と混ざり合う辺りに貝をたくさん育てて、
きれいな海に戻すことに成功した。」

そう言えば、町の人が住む家を建てるのに山の木をいっぱい使ったので、

山は、はげ山のようなようでした。

町造りの主人は、早速、農園から人を集めて山に木を植えました。

山の木を管理をする場所を山林と呼び、農園や海畑と同じく暮らせるように造られました。

また、貝の海畑は、海藻の海畑から人を集めて造り、

そのまま海畑の住民で管理することとしました。

農園、海畑、山林では、ゆっくりゆっくり変わりながら平和な日々が送られていきました。

一方で、町の様子はというと、ものすごい速さで変わり続けていました。

今では物を作るのは機械です。

高速で、大量に、正確に、休まず、物を作り続けます。

物を作る機械を造るのも機械です。

そんな訳で大商いの主人の下で働くのは、大抵は機械で、

人は、機械の管理者かお店番くらいしかいません。

機械に仕事を奪われた者は、農園や海畑や山林に向かえばよかったので、

問題はありませんでした。

こうして町で働く人は減り続けました。

やがて、町では物を買う人が少なくなり、物は売れなくなりました。

大商いの主人は困りました。

いろいろと考えて、農園で暮らす人に物が売れないかと考えたのですが、

農園では長い間、銀丸を使わずに暮らしていたので、銀丸を全く持っていませんでした。

大商いの主人はどうすることもできず、次々とお店をたたんでいきました。

そして、今までに溜め込んだ銀丸で、町での生活を続けたのです。

町からは活気が消え、ひっそりとしてしまいました。

銀丸と農園

町造りの主人は、町に活気を取り戻そうと考えました。

そして、大商いの主人を集めて話しました。

「大商いの主人。

あなた達は安くて良い物を売るために、効率よく仕事をするよう努力してきました。

そして今や仕事をするのは機械です。

町で働く人の数は減り、物を買う人が減り、結果として

お店を続けることができなくなっています。

だからといって、あなた達に効率よく仕事をするなどは言えません。」

町造りの主人は続けて言いました。

「町に人を戻すためには、町で生活する人が銀丸を稼ぎやすくする必要があります。

短い時間の仕事で、当面の生活ができる銀丸が稼げれば、

多くの人が町で生活することができるようになるでしょう。

そこで大商いの主人には、短い時間で銀丸2つを払う価値がある仕事を、

考え出して欲しいのです。」

町のお店では、銀丸1つで3日分の食べ物が買えました。

また、銀丸1つで10日分の部屋代となりました。

1日に銀丸2つを稼げれば、当面の生活はなんとかなったのです。

まず、肉屋の大商いの主人が話し始めました。

「私の店ではお客さんが多くなる時間は食事の前と決まっています。

その時間だけ人を増やせば、お客さんを待たせずに済みます。

私は1,000軒の店を持っていますが、朝、昼、晩に1軒につき3人を雇いたいと思います。」

「ありがとう。」

と町造りの主人はお礼を言いました。

次に話し始めたのは服屋の大商いの主人でした。

「服がよく売れるのは季節の変わり目の3月、6月、9月、12月です。

この、服がよく売れる月だけでいいのであれば、1,000人を雇いたいと思います。」

「ありがとう。」

と町造りの主人はお礼を言いました。

次に話し始めたのは、今や町で一番の大商いをしている機械屋の大商いの主人でした。

「うちでは新しい機械を次々に作っています。

新しい機械は、お店に納めた後に使いやすいかどうかを聞いているのですが、

お店に納める前に、機械を十分に動かして確認したいと考えていました。

機械の使いやすさを試すために、うちでは1,000人を雇いたいと思います。

また、お店に納入する時の人手を増やしたいので、1,000人を雇いたいと思います。」

「ありがとう。」

と町造りの主人はお礼を言いました。

そうすると、他の大商いの主人も短い時間で銀丸2つを払う価値がある仕事や、忙しくなる時期だけの仕事を次々に話し始めました。

町造りの主人と大商いの主人は、それらの仕事の説明をするため、

農園や海畑や山林へ向かいました。

農園や海畑や山林の人々の中で、これらの仕事に興味を持ったのは若者でした。

若者は町での便利な生活を好んだのです。

間もなく町には若者が増え、活気が戻りました。

若者の中には、銀丸を溜めて、それを元手に商いを始めて成功する者も、少なくありませんでした。

それから3年経ちました。

小さな島国は、町も農園もにぎやかで活気があり、外国からも商人やら旅行者やら学生やらの多くの人が集まるようになりました。

そして、いつしか世界一の都と呼ばれるようになりました。

銀丸は世界中のどこでも信用され、服や食べ物と交換できるようになりました。

銀丸は大量に造られて世界中で使われたのです。

銀丸の表には歴代の町造りの主人の顔が刻まれました。

銀丸の裏にはトウモロコシの絵が刻まれました。